

キャリアウェイ

～理系女子学生のキャリア教育と活躍促進のための環境整備に関する研究

■プロジェクトの目的と意義

本研究プロジェクトは、次世代女性理系人材育成キャリアウェイ整備、すなわち、特に理系学部を中心として、入り口から出口まで、女子中高生理系選択支援から女子学生のキャリア教育、そして女子学生の就職力開発、卒業後のキャリア継続と再教育、女子大学院生・若手女性教職員の活躍促進のための環境整備を推進する実践的研究を目的としています。

本研究プロジェクトは、日本大学が、よりよい教育研究環境を提供し、よき職業人を育成する大学としてのステイタスを確立するための戦略として大きな意義をもっており、また本研究プロジェクトで構築した部科校・各部署の教職員が一体となって推進する全学連携推進体制、および校友会や企業等との連携システムを、他の事例にも適用することで日本大学全体の一体感が生まれ、より大きな組織力を活かした大学運営が期待できます。

■プロジェクトの位置付け

1) 日本の現状と今後のニーズ

日本が世界経済をリードし、イノベーション創出していくためには多様な科学技術人材の開発と活用が重要です。現状日本の研究者・技術者の女性比率は約 13%と先進国の中で最低であり、女性理系人材の育成とキャリア教育が必要と考えます。大学発展のためにも、現状 30%程度である女子学生の確保と増加が課題です。

2) 女性研究者支援モデル育成事業の成果

日本大学は、平成 20-22 年度文部科学省 科学技術振興調整費により、女性研究者支援モデル育成「キャリアウェイ・ユニバーサル化日大モデル」事業（研究代表者：総長、総額約 1 億 5 千万円、間接経費 30%を含む）を実施しました。本部および各部科校の教職員が一体となり、男女共同参画に関わる環境整備と次世代女性研究者育成を推進し、女子学生のキャリア教育や女子中高生理系選択支援、そして大学院生や若手女性研究者のキャリアアップなどの次世代育成キャリアウェイ整備企画にも力を入れました。活動の成果は内外に高く評価され、特に事業の事後評価では総合 A 評価、うち目標達成度としては S 評価を得ております。

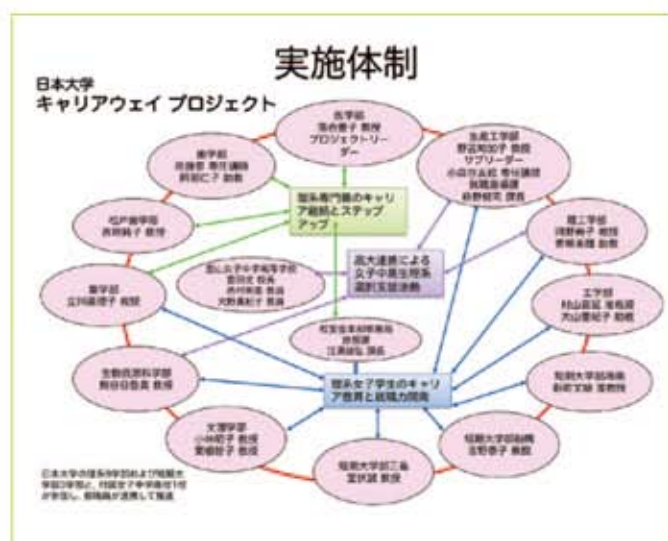
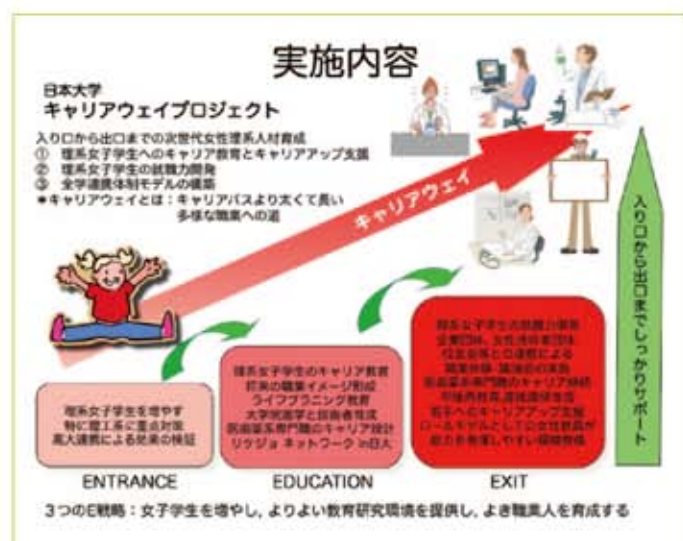
3) モデル事業終了後の進捗状況と本研究プロジェクトの大学における位置付け

この活動を契機として、モデルとなった学部には男女共同参画委員会等が発足し、事業終了後も男女共同参画講演会や女子学生キャリア教育、女子中高生理系選択支援活動等を継続しており、平成 24 年度より日本大学本部に男女共同参画委員会が発足しました。本プロジェクトでは、理系女子学生のキャリアウェイ整備を中心とした活動を部科校・各部署の教職員および校友会が連携して実施いたします。

■年次計画（2 年間）

平成 24 年度

- 1) 研究プロジェクト推進体制の整備：部科校連携推進 ML、WEB 会議システム整備、定期的な連絡会議開催等
- 2) 研究プロジェクトの広報：ホームページの立ち上げと運営、広報用リーフレットの作成、成果報告会の開催
- 3) 女子中高生理系選択支援：オープンキャンパスにおける女子中高生のための体験実験や女子学生による進学相談、附属女子中学高校と連携した学部訪問企画や出前実験と進路調査
- 4) 理系女子学生のキャリア教育：社会で活躍する卒業生や企業人を招いた講演会、ライフプランニング講演会等の実施
- 5) 理系女子学生の就職力開発：企業や女性技術者のグループと連携した女子学生向けインターンシップや懇談会、企業女性研究者との交流体制の整備



- 6) 理系女子専門職と若手女性教員のキャリア形成環境整備：医歯薬系等の専門職の職業継続やキャリア形成、再教育・産後復帰・生涯教育支援の環境整備、若手女性教員・大学院生等のキャリアアップ支援
- 7) 女子卒業生のデータベース化とロールモデル集の作成：社会で活躍する日本大学出身の女性のデータベース作成、キャリア教育や就職力開発に活用

平成 25 年度

上記 1) から 7) の継続に加え、最終報告書の作成、ロールモデル集の作成。

期待される成果

本研究プロジェクトの実施により次のような成果が期待でき、教育研究活動および運営に活かすことができると考えております。

- 1) 理系女子学生キャリア教育：早期実施により、継続的に職業人として社会で活躍する理系女性を育てることができる。
- 2) 理系女子学生の就職力向上：社会体験や企業人との交流により、就職率の向上と離職率の低下が期待できる。
- 3) 理系女子専門職のキャリア形成環境整備：社会に貢献する専門職女性が増え、医師不足問題等を改善できる。
- 4) 理系女子学生・大学院生の増加：女子中高生理系選択支援活動と活躍する卒業生の増加により入学者が増加する。
- 5) 男子学生および文系への波及効果：本研究プロジェクトで得たノウハウを、男子大学生や文系にも適用し展開する。
- 6) 全学連携推進体制の整備：構築した全学連携推進体制を他の事例にも適用し、大きな組織力による大学運営へ。
- 7) 新たな大学発展のチャンス：校友会や企業との連携を共同研究や共同開発、受託研究等に活かす。

成果の公表計画

本研究プロジェクトの成果については、以下の方法で逐次公表、広報いたします。

- 1) 成果報告公開シンポジウム開催、最終成果報告書を作成、ロールモデル集の作成。
- 2) 学内広報：企画・活動は逐次、本研究プロジェクトホームページ、日本大学新聞、日本大学広、校友会・同窓会誌等で紹介、広報リーフレットを作成、配布。
- 3) 学外広報：外部ホームページへのリンク、本学の活動を紹介、広報リーフレットを作成し、オープンキャンパス、高校訪問時に配布。
- 4) 教育学系学会の大会、女性研究者支援事業合同シンポジウム、男女共同参画学協会連絡会シンポジウム、女子中高生夏の学校等における講演やポスター展示による実践的研究の成果発表と広報。

浅野 早苗

日本大学 生物資源科学部 動物資源科学科 助手



仕事の内容とやりがい

学部時代の指導教員が退職する際に声をかけて下さり、現在の職を得ました。タナボタ?で始まった大学生活はまだ2年目です。研究室の教授が化学や機器分析にも強く、苦手分野を克服すべく学生と一緒に頑張って勉強中です。よく分からなかったことが急にクリアになって、理解が進む瞬間は何歳になっても楽しいです。

現在興味あるテーマはざっくりと「反芻動物を中心とした草食動物の飼料利用特性」です。ウシ、ヤギ、ゾウ、テングザルなどを対象として消化性の研究を行っています。特に植物繊維の利用性に注目しています。動物は生存にエネルギーと栄養素を必要としており、長い年月をかけて各々の採食戦略を獲得してきました。それぞれの進化的背景を持つ動物を栄養学的に比較する作業は、大学以外の研究施設ではなかなかできないことのひとつだと思います。



進路決定のきっかけ

学部時代、野生動物に興味があり、一般公開されている講演会に参加したり、知床の羅臼町で自然保護ボランティアをやったりしていました。反芻動物と同様に複胃動物であるクジラの消化試験がやりたくて、現在の動物栄養学を専門とする道に進みました。当時、クジラの消化試験は無理と言われましたが、取りあえず消化性評価の基礎を身につけようと一歩踏み出したわけです。大学院では出来ることとやりたいことのすり合わせを行った結果、ニホンジカの消化性について取り組むことに決めました。進学先の先生は反芻動物の栄養学を専門としている偉い先生でしたが、対象はウシを中心とした家畜でした。「ニホンジカ」にこだわる私をよく引き受けてくれたなあと思います。シカ研究は思った以上に奥深く、ウッカリ博士課程にまで進んでしまいました。



ワークライフバランス

現在、結婚生活7年目で2歳の息子がいます。夫とは仕事の関係で別居しています。家族水入らずで過ごせるのは週末だけ。週末は、公園を散歩したり水族館に行ったりと、仕事から離れて家族との時間を楽しみます。平日は、子供は保育園以外の時間はほぼ実家で過ごしています。実家のサポートがないと今の生活は成り立ちません。お迎えから夕食、寝かしつけに至るまでほとんど父が中心になってやってくれます。子供はママがいなくてもイクジイがいればご機嫌なので安心です。また、子供の風邪や体調不良などで仕事を休まざるを得ない日も少なくありませんが、急な欠勤でも研究室の教授が快くカバーして下さいます。私は本当に周囲の人に恵まれています。たくさんの人に支えられて今の自分があるのだと感謝せずにはいられません。



未来の女性研究者へのメッセージ

自分に与えられた環境では、興味の有無に関わらずベストを尽くすこと、一方で、やりたいことはライフワークとしてでも続けるのが大事だと思います。家畜改良センターではそれまでの専門性を活せない部署に配属されました。しかし、そこで努力して得たものは今でも役に立っています。また、興味のあったことについては、個人的に研究会に参加したり、職場内の詳しい人に話を聞いたり情報収集を続けました。その時に繋がった人間関係は現在の大学生活でも宝になっていると感じています。

「好き」を職業にできるかは努力だけでは叶えられない要素も多分にあるかと思いますが、ただし、好きなことに関わり続けるのは誰にでも可能です。思い描いた夢とは異なっても、後ろ向きにならずに好きなことは続けて下さい。その方が豊かな人生を送れると思いませんか?



*プロフィール

神奈川県立湘南高校(普通科)卒業→日本大学生物資源科学部 動物資源科学科 卒業→東京農工大学大学院農学研究科生物生産科学専攻修了→東京農工大学大学院連合農学研究科生物生産科学専攻修了→東京農工大学特別研究員→神奈川県畜産技術センター(現・農業技術センター畜産技術所)臨時技師→(独)家畜改良センター→現職

麻生 久美子

日本大学生物資源科学部 国際地域開発学科 助教



仕事の内容とやりがい

国際地域開発学科で英語関連科目を担当しています。国際地域開発学科では、実践的な英語、コミュニケーション力というものを重視し、「途上国など世界中のどこに行っても英語を使って人とコミュニケーションが取れる」という学生の育成をめざしています。私は、専門は英語教育を含む教育全般で、特に日米比較教育、教育民営化、また多文化教育を研究しています。同時に、英語教育分野で国際交流やメディアを通じた英語学習についても調査研究しております。これまでに携わってきた小学校から大学までの教員経験を振り返りますと、英語教育でも日本語教育でも、常に私は「教育」現場の前線で生きてきたと言えます。故に「先生」であること、そしてそのための研究や勉学を日々怠らず、続けていくことが自分の人生だと感じています。



進路決定のきっかけ

そもそもはフランス文学を学び、その分野での研究をしてみたいと思っておりましたが、大学卒業後、東京都教員試験に受かったのをきっかけに、公立中学校英語科教員になりました。そこで人間として、また英語科教員としてとことんまで鍛えられ、多くの生徒と接し、また同僚の素晴らしい先生方にも出会いました。ただ、教員経験から教育分野での学びをさらに続け、深めたくなり、また研究、留学という希望を捨てきれずにもいたので、東京学芸大学の大学院で学び修士号を取得しました。その後、教員を辞して渡米し、教育課程や比較教育などの教育分野で修士号と博士号を取得しました。アメリカでは、3つの州の大学院に通い、各州の独自性に触れアメリカの多様性を実感することもできました。帰国後は大学レベルでの教育に携わり、現在に至っています。



ワークライフバランス

女性は人生のイベントにより、生活や環境が左右されることが多いと思います。私も当初、大卒数年後に留学を計画していましたが、留学どころか結婚が決まり、人生が大きく変わりました。31歳で思いがけない大病にも見舞われました。私の場合、人生とは計画通りにはいかない、むしろ計画通りに行くことなどほとんどゼロに近いと思い知りました。私は常に「結果オーライ」で行こうと心に決めています。出た結果、つまり「今」がベストであるということです。選択を間違っただけでもそれも後で考えればよかったと思うに違いないと信じていることが、私にとって私生活と仕事を両立させる秘訣ではないかと思うのです。



未来の女性研究者へのメッセージ

私の分野では、教育現場に出ること、現場を知ることが重要なことと私は考えています。故に自らの現場での経験が、研究者としての今の自分の大きな「強み」だと思っています。研究において自分の強みは何かを知ることは研究の独自性にもつながり、同時に研究の展開にも役立つのではないかと思います。ただ、そういうことはあらゆる意味で経験を積み重ねなければ得られない、つまり、これからの皆様には「長く続けてくださいね」ということになりましょうか。



*プロフィール

私立恵泉女学園高校(東京・世田谷)卒業→中央大学文学部文学科フランス文学専攻→東京都英語科教員試験に合格し、公立中学校英語科教員→東京学芸大学総合教育学部多言語多文化教育コース修士号取得→渡米し、アメリカカリフォルニア州アナハイバ→ミシガン大学にて修士号、ニューヨーク州「ニューヨーク・ロンドン」大学にて修士号、ミネソタ州「ミネソタ」大学にて博士号取得→在米中の職歴としてミシガン大学アジア文学言語学部にて日本語専任講師→帰国後、いくつかの大学にて非常勤講師を経て、現職。

● 伊藤 かな子
独立行政法人医薬品医療機器総合機構
再生医療製品等審査部



仕事の内容とやりがい

私の所属する組織では、医薬品による健康被害の救済に関する業務、薬事法に基づく医薬品・医療機器などの承認・審査関連業務、およびそれらの安全対策業務を行っています。その中で、私は主に再生医療製品の承認申請に向けた助言や審査を行っています。

今の業務は、実験器具を使って研究するものではありません。開発中の製品については、今後、国の承認が得られるような製品作りに関して、企業やアカデミアの先生方と議論を交わしながら開発の進め方の助言を行います。また、実際に出来上がった製品については、製品の安全性及び有効性の審査を行います。再生医療の分野は、日本で承認された品目が少なく、制度も変わりつつあるため、手探りで進むことばかりですが、未来の日本の医療に貢献しているという点にやりがいを感じています。



進路決定のきっかけ

大学院進学のかっけは、「自分が卒業研究で取り組んだテーマをより深く理解したい。」という単純な気持ちでした。どんな分野でもそうですが、基礎研究の分野では解明されていないことばかりですので、学生のうちに得られる成果はほんの一部に限られています。その中で新たな現象を見つけたときにそのまま研究を終わらせてしまうのは、歯がゆい思いがして、さらにその先にある何かを見つけ出したいと思い研究を続けることにしました。また、今思えば、周囲の「研究好き」の方々と共に研究することの楽しさを話し合ったり、自分の仮説を立証できた時の喜びがあったからこそ、研究を継続できたと思います。そして、研究を続けていくうちに、さらにその先のかたち（製品）、そして、製品がもたらす人の暮らしに関わってみたいと思うようになり、就職先を考えるようになりました。



ワークライフバランス

今はまだ独身なので、仕事と生活のバランスについては、特に意識していません。現職では、周囲の方達と議論をしながら仕事を進めていくので、経験不足・知識不足を痛感することが多く、稼働日の平日はできる限り仕事に時間を費やしています。その代わり、週末はゆっくり休んだり、サイクリングに出かけたり、友人とおしゃべりや音楽を演奏してリフレッシュしています。まとまった休暇が取れるときは、旅に出て自然の中で過ごすことも良い気分転換になっています。

大学院生の頃は土日とも構わず研究に時間を費やしてしまうことが多かったのですが、今は仕事から全く離れる時間を作ることで、気持ちを切り替えるタイミングを作るようにしています。その方がストレスを溜め込まずに長く続けられると感じるようになりました。



未来の女性研究者へのメッセージ

現在はラボワークに従事するいわゆる「研究者」という立場で仕事をしているわけではありませんが、研究を通じて得た人脈や科学的な視点から物事を考えることは、どの仕事にも活かすことができると思います。

進路を決めるにあたり私もずいぶん悩みましたが、研究職に限らず進路を考える人は、様々な職業の人に直接話を聞いてみることをお勧めします。今はインターネットで様々な情報を一方的に入手することはできますが、働く人に直接話を聞いて、相談しながら考えていくことで、新たな選択肢が生まれることもあります。私自身、これまで出会って話を聞かせてくれた方、相談に乗ってくださった方には今でも感謝しています。

みなさんも入手できる文字情報に加えて、積極的に自分の目指す分野の女性に直接話を聞いてみてください。研究者を含めて意外なところに続く道はあるかもしれません。



*プロフィール
私立常総学院高等学校卒業→日本大学生物資源科学部・獣医学科卒業→日本大学大学院獣医学研究科獣医学専攻博士課程終了→内閣府食品安全委員会技術参与→現職

東北大学大学院 医学系研究科
生物化学分野 産学官連携研究員

伊藤 亜里



仕事の内容とやりがい

血液細胞が、骨髄で多能性をもつ造血幹細胞から何段階もの分化段階を経て、様々な種類の成熟血球に分化する機構を研究しています。個体の細胞が持っているDNAは同じですが、どの遺伝子が発現するかによって細胞の性質が決まります。このとき、遺伝子の発現を制御するのが転写因子という蛋白質です。iPS細胞を作製する際に細胞に導入する山中因子も全て転写因子で、その威力がわかります。転写因子は、分化に必要な蛋白質の遺伝子発現を促進し、分化の邪魔となる因子の遺伝子発現を抑制したりします。最近、自分が研究していた転写因子が発現を制御する標的遺伝子は、細菌を認識する分子であるということを見つめました。細菌感染時には血液細胞の分化が大きく変化することが知られており、現在私は、この転写因子が細菌感染時にどのように働くのかを調べ始めています。これは、予想外の発見でしたが、このような意外な発見があることが、非常に刺激的で、飽くことなく、私ができる限り研究に携わりたいという理由です。



進路決定のきっかけ

動物資源科学科では、畜産、経営、育種、草地、発生、免疫など、幅広い分野の学問に触れることができ、その環境の下で自分は免疫学に興味があるという事を見つめました。その後、技術員として日本医科大学で働いていた時に、様々な種類や分化段階の免疫系の細胞に有機リン農薬をふりかけて、その毒性を見るという研究をしていました。その結果を学会で発表すると、「この発見が生体にとってどう影響されると考えられるのか」、「この有機リン農薬を使用している作業者の健康被害の状況はどうか」といったような至極当然な質問を受けましたが、その時の私はそのような質問に全く答えられないという状況でした。この経験から、細胞レベルで起きる現象の生体への影響を考えられるようになれば、もっと面白いだろうと思うようになりました。大学卒業後、恩師の甲斐蔵 先生（現動物・伴侶動物学研究室）から「機会があったら研究を続けてください」と書かれた年賀状をいただいたことが心に残っていた事もあり、大学院進学を決意しました。



ワークライフバランス

子供がいるので、仕事の時間が限られていますが、そのおかげで、時間を無駄なく効率よく仕事を進められている気がします。複数の共同研究者と研究を進めているので、1ヶ月先位まで実験の予定を組んでいます。家族との時間が、最高の気分転換、頭の中にアイデアが浮かぶ余地を作ってくれています。余裕がない時は夕ご飯作りをあきらめて外食にするなど適度に手を抜いて疲れきってしまわないようにしています。理解してくれる家族に日々感謝です。



未来の女性研究者へのメッセージ

女性研究者の割合は、男性に比べて少ないですが研究の世界では男女の区別はありません。自然は様々なユニークでヒトの想像を遙かに超えるシステムを構築しており、研究職はその一端を解明する非常にやりがいのある、贅沢な仕事です。同級生でも先輩でも教授でも、研究について徹底的に討論できる相手を見つけてください。そして、自身が面白いと思う方向に向かって全力で進んでいけば、道が見えてくると思います。



＊プロフィール
日本大学豊山女子高校卒業→日本大学生物資源科学部 動物資源化学科卒業→日本医科大学 衛生学・公衆衛生学教室研究技術員→結婚→退職→東北大学大学院 医学系研究科 修士課程修了、修士（医学）（修士課程中に長女出産）→同 博士課程修了、博士（医学）（博士課程中に長男出産）→日本学術振興会特別研究員（DC1）→現職

その挑戦が自分を大きくする、迷わずチャレンジしよう。

● 上原 亜希
千葉製粉株式会社
製粉・ミックス事業本部 開発部 ミックス開発課



仕事の内容とやりがい

惣菜系ミックス粉の配合設計を中心とした商品開発が私の仕事です。現在は研究上の業務とは言えませんが、将来研究分野に所属しても、今の開発業務に就いた経験を活かすことができていると思っています。ミックス粉とは小麦粉やでん粉、食品添加物（膨脹剤など）などを粉体混合して、誰もが簡単に商品を作れることを目的としたものです。小麦の粉碎や加工処理方法には、粒子径分布、粉粒体の流動性など、化学工学がその基盤として重要な役割を担っています。開発と同時に研究者の視点ももって遂行するところに充実感が生まれます。自ら体験したことに疑問の余地はなく着実に身に付きます。自分で開発した商品が市場へ出るときの喜びは格別です。「この時、この瞬間」に集中することが仕事の動力になっていると言えるでしょう。



進路決定のきっかけ

研究を通じて、学会発表や他機関の研究者と知的にも人間的にも交流できることが研究の醍醐味であると思います。より深く研究したい、研究の解析に必要な知識を習得したいと感じるようになったこと、幅広い研究者と交流することへの憧れを抱き始めたことが大学院進学へのきっかけです。国内海外の研究者と討論できる機会や自分が研究した内容を論文として世界へ発信できる機会があることは、大きな目標になります。1つのテーマに対して多方面から様々な考え方で捉える習慣が身に付き、会社で働く際にも武器になります。「滅多に経験できないチャンスが大学院生にはある！」と思うと、研究に対する思い入れや責任感が強くなります。学部生と大学院生とでは生活スタイル、研究への熱意、勉学への姿勢は質的に大きく変化します。進学してこそ得られる実感は格別ではないでしょうか？



ワークライフバランス

挑戦を躊躇した瞬間にチャンスは逃げていきます。どんなことにも挑戦する姿勢を身に着けることが大切です。仕事でも私生活でも迷ったら挑戦する。その挑戦が次の目標に繋がります。大学院時代では、国内外の学会発表に挑戦し、英文の学術雑誌に原著を発表し、自分でも非常に高い目標と思ったことにも挑戦することが出来ました。先生や研究室の仲間にも恵まれ、迷わずに挑戦しようと決意できたことが実現に繋がったと思います。研究室の雰囲気も非常に大切であり、仲間との語らいは深い絆をもたらします。この経験は、“見せる・聞かせる”技術として現在の仕事で活かされています。個人としての私生活ではランニングをはじめ、マラソンに挑戦しています。年に数回大会にも挑戦しています。走ることが苦手だったことがウソのようで、今では趣味になりました。仕事でも私生活でも挑戦する姿勢は忘れずに、次なる目標を見つけるためにチャレンジし続けています。



未来の女性研究者へのメッセージ

研究が楽しい、もっと知りたい、もっと勉強したいと思ったら、納得するまで研究しましょう。この気持ちを持ち続けることで、今まで知らなかった自分に出会えます。大学院生活は研究ばかりではなく、研究を通じて得られる人とのつながりがあります。研究成果だけではなく、成果を得るための経験や過程も大切です。人脈を広げ、経験できないことを体験してみませんか？その経験こそが自分を大きくし、見方や考え方を変え、次の目標が見つかるでしょう。考えて挑戦するのではなく、挑戦してから考えましょう。まずはチャレンジしてみましょう！女性研究者の裾野が広がることで、男性研究者との対話の機会も増え、ひいては両性がカウンターパートナーとしての深い理解のもとに結ばれると素晴らしいと思います。



＊プロフィール
香蘭女学校高等学校 卒業→日本大学生物資源科学部
食品科学工学科(現：食品生命学科) 卒業→同大学院
生物資源科学研究科生物資源利用科学専攻 博士前期
課程修了、修士(生物資源科学)→千葉製粉株式会社入
社 現職に至る。

江尻 寛子 国立感染症研究所昆虫医科学部 流動研究員



仕事の内容とやりがい

仕事内容は吸血性節足動物からの病原体の分離と解析です。簡潔に言い表すと一行で済んでしまいますので、詳細について説明します。最初に行うのはサンプル採集。主に蚊やダニを捕集します。自身が野外の調査地に赴いて捕集することもあります。共同研究者にお願いすることもあります。集めたサンプルは実験に使えるように調整し、培養細胞に接種して一週間程度観察します。細胞に感染する病原体が存在すれば細胞の様子が変化しますが、この辺りは運次第。何か変化があったら、どんなウイルスが居るのかを調べる。以上の作業を続けるという根気のいる作業ですが、何か新たな発見があった時の喜びは、何物にもかえがたいものです。そして病原体と吸血節足動物と脊椎動物の関連を調べ、節足動物が媒介する感染症の防除に役立てていきたいと考えています。



進路決定のきっかけ

最初のきっかけと思われる手がかりは、小学校二年の文集にあります。そこには将来の夢として「昆虫の学者」と書いてありました。その頃、ファーブル昆虫記やシートン動物記を好んで読んでいたことで、特に身近な昆虫に非常に興味を持っていました。その後「手に職を」ということで、獣医師資格を目指して獣医学科の大学に入学、これが第二のきっかけです。そして、大学の研究室を決める時に訪れたある研究室で、蚊が媒介する鳥マラリア原虫の感染サイクルを調査するという話を聞きました。その話を聞いた時、昆虫好きであった幼少期の血が騒ぎ、気が付くとその研究室に決めていました。これが第三のきっかけです。つまり、ぐるりと回って元の場所に戻っていたという感じがですね。



ワークライフバランス

まだまだ手探り状態です。まだ研究者となってから日が浅いこともあり、自分の体力と実験の進め方のバランスのとり方が難しいです。既婚ではありませんが近い内に入籍予定で、問題を少しずつ解決していつている所です。一つ決めていることは家では完全にオフにすることです。パートナーとの時間を大切に過ごすため、そして仕事の時は集中してしっかりやるためにも重要だからです。やる時はやる、抜くときは抜く、楽しむ時はしっかり楽しむと言ったところです。これから家庭を持つ立場ですので、今後さらに問題を抱えていくことと思いますが、これからはパートナーと共にその問題を解決していきたいと考えています。



未来の女性研究者へのメッセージ

研究者になるかどうか、悩むこともあると思います。私は大学院に残るか就職するのか、学部生の最終学年の時に悩みました。そこで私は、研究をやっている自分とやっていない自分が想像できるか否かを考えてみました。その結果、研究をやっていない自分は想像できましたが、研究をやっていない自分は想像できませんでした。選択を迫られて悩んだときに考えてみてください。その行為をしている自分としていない自分を想像できるかどうかを。そして「やっていない自分」が想像できなかった場合、その道を進んでみてはいかがでしょうか。



***プロフィール**
日本大学習志野高等学校卒業→日本大学生物資源科学部・獣医学科卒業→同大学院獣医学専攻博士課程修了・博士(獣医学)→日本学術振興会特別研究員および国立感染症研究所昆虫医科学部流動研究員(現職)

教員から研究を経て両分野を活かす職場へ

上村 真由
学校法人アジア学院アジア農村指導者養成専門学校
農場（作物・野菜）担当



仕事の内容とやりがい

世界には貧困・食料不足・差別などで苦しんでいる人々がたくさんおり、この状況を打破しようと頑張る人がいます。私は、より良い地域社会を創造するために、現地の人と共に歩むリーダーを育てる学校で働いています。そこでは、各地域で持続的な農業を行えるよう、有機農業を軸とした作物や野菜栽培を学生（今年度は16か国31名）と共に考え実践しています。

私の仕事は、皆さんの抱く研究者のイメージと少し違うかもしれません。しかし、F1品種から地域にあった品種の固定、地域の資源を利用した稲作、野菜栽培方法を工夫するなど、幅広い地域で応用できる技術を模索し、様々な取り組みを行っています。「この技術を自分たちの村に取り入れてみたい。」と学生から言ってもらえることが、何よりの喜びです。



進路決定のきっかけ

幼い頃、飢餓で苦しむアフリカの人々の映像を見て農業の大切さを実感し、持続的な開発とは何かを勉強するため、国際地域開発学科に入りました。

卒業後、神奈川県農業高校に採用され教職の道に進みましたが、海外への夢を諦めきれず休職して青年海外協力隊に参加しフィジーで技術指導を行いました。この活動をきっかけに、フィジー人が現地に適応する技術を日本で身に付けてもらい、現地の農民に伝えていく方が、効率的かつ継続的に技術が普及するのではないかと考えるようになりました。そこで、さらに自分の知識と技術を向上するために大学院へ進学し、現在の職場に就職しました。

大学院時代は、「農学研究は、農家のためにある。農家レベルで物事を考えよ。」という先生の方針のもと、泥まみれで研究を行ってききました。これからも、そのスタンスで仕事を続けていきたいです。



ワークライフバランス

毎日、圃場へ出て農作業を行う体力勝負の仕事です。播種したら収穫までは植物の生育に合わせて生活するので、休日はほとんどありません。社会人になってすぐは、仕事が終わらないとみんなに迷惑がかかると思い、夜遅くまで仕事をしたり、食事を抜いたりリズムがつかめずに、体調が悪い日が続いていました。

現在は、「きちんとした仕事をするためには、心身ともに健康でなければならない。」をモットーに、体調を崩したときは上司に相談して早めに休むようにしています。また、早寝・早起き、三食きちんと食べることを心がけ、体調管理を優先しています。自分で育てた野菜や作物を自分で料理して食べるということも、健康の秘訣です。



未来の女性研究者へのメッセージ

私が大学院で勉強しようと思ったのは、30歳を過ぎてからでした。教師をしている時も、農業に関する技術・知識が足りないと感じていたし、自分の好きな植物とじっくり向き合いたいと考えたからです。教師を辞めるのか…と、自問自答しながらも、自分のやりたいことを諦めると後悔すると思い、大学院進学を決めました。

研究や勉強を始めるうえで、年齢やキャリアは関係ありません。自分がやりたいと思った時が、スタートです。自分はこうありたいという目標を大切に、そのために、今の自分に何ができるのかを考えて進路を決めて下さい。ただし、女性は30歳を過ぎると、就職先を見つけるのが大変なので、専門技術をしっかり身に付けることが大切です。



*プロフィール
横浜市立桜丘高等学校卒業→日本大学生物資源科学部・国際地域開発学科卒業→神奈川県立吉田島農林高等学校教諭→青年海外協力隊現職参加（派遣国…フィジー・共和国・職種…野菜）→神奈川県立平塚農業高等学校教諭→退職→高知大学総合人間自然科学研究科農学専攻修士課程修了、修士（農学）→現職

金京純
鳥取大学農学部 共同獣医学科 助教



仕事の内容とやりがい

大学での獣医寄生虫病学の講義・実習を一部担当しながら、鳥類の血液に寄生する鳥マラリア原虫という寄生虫を媒介する蚊の研究をしています。寄生虫や感染症は特別なものではなく、私たちと同じ生態系の一部です。人への病原性の有無に関わらず、自然界において感染症がどのように存続しているのかを明らかにしたいと考えています。野生動物の感染症については、分かっていないことだらけですので、研究を進める中で色々としんどい面もありますが、今の仕事は努力した分だけ新しい発見に出会えます。また、研究を通して国内外問わず色々な人と出会えるのも、この仕事の魅力の一つです。研究職における日々の活動自体は、とても地味な作業ですが、研究成果をどのように社会に還元し役立てられるかを考え、それらをイメージすることで、仕事にやりがいを感じます。



進路決定のきっかけ

私は、中学生の頃に、初めて獣医師という仕事があることを知りました。それからは、獣医師になることを目指して、獣医学系大学へ進学し、獣医師免許を取ったものの、具体的にやりたい仕事が決まりませんでした。当時は、研究の道へ進むとは思っていませんでしたが、留学や野生動物の研究調査にボランティアとして参加しているうちに、野生動物の感染症について知りたい、と考えるようになり、現在に至ります。私の場合、色々としんどいながらも、自分の好きなことを仕事として続けていられるのは、両親を始め、周囲の方々の絶対的なサポートがあるお陰です。進路選択に迷った時は、世間一般的な考えに左右されるのではなく、周りにいる色々な人の意見を参考にしながら、自分の意思を大事にすると良いと思います。



ワークライフバランス

これまでお世話になってきた大学や研究機関において、過度な労働や残業などを強いられた経験は一切無く、仕事と生活のバランスは、自然と保たれてきましたので、意識して工夫していることはありません。現在も、とても恵まれた労働環境に置かれていると感じています。今後、仕事と生活のバランスを考える必要性が生じた際には、客観的に自分の生活を見直すよう心掛けようと考えています。



未来の女性研究者へのメッセージ

私の研究者としてのキャリアは長くはないですが、これまで性別による有利・不利を意識したことはありません。ただ、現役として活躍している獣医師、特に研究職における女性の比率は低いのが現状です。一般に、女性は柔軟性や異文化への適応力に優れているそうなので、時代と共に国際化が進み、獣医学を含む科学の分野においても、外国の研究者との情報交換や共同研究が当たり前になっている中で、文化や考え方の違いを楽しむことができる事は社会で活躍する上で大きなメリットになると思います。性別に関わらず、一人一人が自分の強みに気づき、それを将来仕事に生かせるよう大切に磨いていって下さい。



＊プロフィール
私立志学館高等学校卒業→日本大学生物資源科学部
獣医学科卒業→海外留学やボランティア等→岐阜大
学大学院連合獣医学研究科→日本学術振興会特別研
究員→日本大学動物医科学研究センター博士研究員
↓現職

久保田 裕美

日本大学 生物資源科学部 食品ビジネス学科 助教



仕事の内容とやりがい

一番のやりがいは、未来の「食」を創る仕事に携わることができるということです。「食」は、身体への栄養だけでなく、心の栄養としてもとても大切なものです。これからの「食」のあり方は、時代と共に変化していきます。学生との議論やコミュニケーションを通じて、また、食料や食生活に関する実証研究を通じて、社会的視点から、「豊かな食」とは何か、それを実現するためにはどのような社会的環境や条件が必要であるのかを追求していきたいと思っています。



進路決定のきっかけ

学部時代にアメリカの食品企業でインターンシップをしたことが、現在の進路の原点になったと思います。職場には、メキシコ人など多国籍の人が働いていました。休憩時間等には「日本の農業や食生活はどうなっているのか?」とよく尋ねられましたが、その時は、自国の事についてきちんと答えることができませんでした。帰国後、大学4年生に復学しました。就職か進学かというところでは、アメリカで感じた「自国の食料・農業のことについてもっと深く知りたい」という欲求が強かったので、自然と大学院進学を考えるようになりました。学部では化学を専攻していたこともあり、栄養学か農学かと迷いましたが、当時いろいろ研究室を訪問し、先生や先輩から直接にアドバイスを受け、最終的に農業経済学を専攻しようと決め大学院を受験しました。



ワークライフバランス

現在、片道2時間の通勤をしています。往復4時間は仕事と生活の両立という点では楽ではありませんが、その時間で資料を読んだり考えを整理したりと集中できる貴重な時間として活用しています。長女は5歳、次女は2歳になりますが、突然の発熱で保育園から連絡をもらうこともあります。私が一番に駆けつけたくても物理的に難しい事が多く、夫や実家の家族が交代で迎えにいらしてくれています。夫や家族の協力は、体力面では元より、精神的にも、非常に大きな支えとなっています。恩師、職場の上司、先輩、友人など、これまで本当にたくさんの人々に助けられ、現在にいらっています。



未来の女性研究者へのメッセージ

進路選択について、まず自分の好奇心のアンテナを大きく伸ばすことが非常に大事だと思います。アンテナを伸ばしていると、ここぞというタイミングで物事を決断をすることができます。私自身は、大学の掲示板にあった「海外留学奨学生募集」の案内を見たことが、後の進路に続く重大なターニングポイントとなりました。日頃から「いつかは海外へ行き、外の世界から日本を見てみたい」と思っていたからこそ、当時も数多くあった情報の中から、そのポスターが目に入ったのだと思います。情報をキャッチしたら、後は行動に移すことが大切です。きっかけ(チャンス)に気づく感性(アンテナ)を持ち、小さなことでも行動してみることで、未来に続く新たな道が開けるかもしれません。



*プロフィール

東京都公立高校卒業→日本大学文理学部化学科入学→3年生修了後休学→アメリカワシントン州インターンシップ留学→帰国4年生に復学→卒業→東京農工大学大学院国際環境農学科進学→アメリカカリフォルニア州に短期ZOインターンシップ留学→修士課程修了→東京農工大学大学院連合大学院農学研究科博士課程修了→博士(農学)→ZOO団体アシスタントプログラムオフィサー→民間研究機関研究員→第二子誕生→日本大学生物資源科学部→第三子誕生→現在

熊谷 日登美

日本大学生物資源科学部 生命化学科 教授



仕事の内容とやりがい

小学校から大学院まで恩師に恵まれ、将来は、これまで出会った恩師達のような教員になりたいと思っていました。今、学生達が成長していく様子を見るのが大きな楽しみです。また、研究で新しい成果を出すことも、もう一つの楽しみです。食品分野の魅力の一つは、日々の食生活で疑問に思ったことが研究に生かせ、また、研究で得た知見が日常生活に生かせるということです。これまでに、食品による骨粗鬆症、アレルギー、血栓症、癌などの予防に関する様々な機能性研究を行ってきました。機能性の改善と同時に、嗜好性の改善も行っています。美味しく、かつ、病気の予防効果を持つ食品を作り、人々の豊かな食生活と健康の維持に役立つことができればと願っています。



進路決定のきっかけ

中学の頃から栄養バランスを考えて食事を作ることが好きでしたが、高校の時の塾の先生の影響で、数学も面白そうと思い始めました。また、女性が生きていく上では資格があった方が良いでしょう、薬剤師も良いかもと考えました。結局、進路を絞らず、食物学科、数学科、薬学科を受け合格しました。このうち、薬学科にしようと思い、高校の担任の先生に連絡をしたところ、翌日、中学の時の担任の先生から電話があり、食物学科を薦められました。進学した食物学科卒業後は中高一貫校の教員になる予定でしたが、研究室の先生から大学院進学を薦められました。そこで、内定を辞退し、大学院に進みました。修士課程修了後、さらに研究をしたいと思いましたが、その研究室では博士課程の学生を受け入れていなかったため、別の大学の博士課程に進学しました。



ワークライフバランス

大学入学後から今に至るまで、常に様々なことを抱えた生活で、“バランス”は取れていませんが、楽しい毎日です。大学時代は5つのクラブに所属し、講義も目一杯取っていました。大学院に進学後は、研究をしつつ、中高の非常勤講師等もしていました。博士課程を修了し、出産後は、子供のことを優先した生活となり、自分のための時間はほとんどなくなりました。帰宅後、子供達の世話をし、夜中から明け方まで、積み残しの仕事をするという生活でした。今は、学生の教育と研究にエネルギーを使おうと努力しておりますが、学会や委員会の仕事も増えてきました。私でお役に立てるのならと思います、できる限り引き受けるようにしています。その時々状況を考えて、しなやかに生きることを心がけています。



未来の女性研究者へのメッセージ

研究者に向いている人は、楽天主で、粘り強く、素直で、論理的思考ができ、成果を出そうという意欲の高い人であると思います。成果が出た時は、道なき道を一步一步登り、素晴らしい眺めの山頂に辿り着いた時のような達成感があります。皆さんにも、ぜひ、この楽しさを味わっていただきたいと思います。家庭を持ちつつ仕事をしようと思っている人へ、恩師からの教えをお伝えします。「女性の人生は相手によって影響を受けやすいので、選ぶ時には慎重に。」「子育ての時期も経歴を途切らさないことが大切。細々とでも続けていれば力が付く。」「子供への愛情は、言葉と身体で直接表現。」「家庭円満のこつは、ストレスを家に持ち込まないこと。」



＊プロフィール
フェリス女学院中学・高校卒業→お茶の水女子大学
政学部食物学科卒業→同大学大学院修士課程修了
↓東京大学大学院農学系研究科農芸化学専攻博士課程修了
↓第1子出産→日本大学生物資源科学部生命化学科(旧農獣医学部農芸化学科)助手
↓第2子出産→講師
↓英国ノッティンガム大学研究員(子供2人を連れて渡英、両親と姑が3ヶ月交代で計6ヶ月ずつ滞在)
↓准教授→現職

小糸 智子
日本大学生物資源科学部 海洋生物資源科学科 助手



＊プロフィール
北鎌倉女子学園高等学校卒業→日本大学生物資源科学部 海洋生物資源科学科 卒業→東京大学大学院新領域創成科学研究科自然環境学専攻 修士課程修了 修士（環境学）→同大学院 博士課程修了 博士（環境学）→現職



仕事の内容とやりがい

私の仕事は、『研究』と『教育』です。深海熱水噴出域や冷水湧出域という、他の深海底に比べて少し特殊な環境に生息する無脊椎動物の環境適応メカニズムを、分子生物学や生化学的手法により解明しようとしています。深海は誰もが簡単にアクセスできる場所ではないのですが、科学技術の目覚ましい発展により国内外で先進的な実験が行われています。そこで、技術重視の研究よりも誰も思いつかないような、アイディア重視のテーマを考えるのは大変ですが非常にやりがいを感じます。教育はまだ慣れませんが、学生には社会に出ても困らないようにタイムマネジメントができるよう、フィールドや日常を通じて指導しています。



進路決定のきっかけ

鯨類とそれを取りまく事情（捕鯨や環境問題）に興味があり、卒業研究では日本鯨類研究所にお世話になりました。周囲に研究者しかいない環境で、学生は一人。指導研究員はアメリカで学位を取った人で、そのためか学生の私に指導、というより対等に考え、議論してくださいました。この経験がはずみになり、もっと知識と技術を身に付けてようと修士課程へ進学しました。博士課程への進学は当初考えておらず、就職活動もしてみました。ただ、違和感を覚えたのでよくよく自己分析してみると、実験の技術や論理的思考に磨きをかけたいという研究への渴求があることに気づきました。そこへタイミングよく指導して下さる先生と出会えたので、そこからは迷うことなく進学しました。このとき、将来のことは全く考えていませんでした。



ワークライフバランス

研究も教育も終わりがあやうでない仕事なので、基本的には月曜から土曜まで、仕事ばかりしています。実習や研究航海などは土日関係なく実施されることも多いので、2週間休みなしということもざらにあります。また、必要と感じれば自分の意思で休日出勤することもあり、友人から付き合いが悪いと非難されることもしばしばです。巷で最近増えているという独身実家暮らしなので、既婚でお子さんがいらっしゃる方に比べれば“ライフ”の占める割合は非常に少ないのではないのでしょうか。電気のスイッチのようにオンとオフの切り替えはなかなか難しいのですが、終業後や休日に心身ともにリフレッシュできればワークライフバランスがとれていると思っています。



未来の女性研究者へのメッセージ

私が博士課程へ進学を希望したとき、博士号をもつ先輩たちは私を慮って諭してくれました。学位なんて足の裏の米粒なんだ、取れないと気持ち悪いけど取っても食えない。敢えていばらの路に来ることはない、と。まさにその通りだと思います。五里霧中、一寸先は闇の世界です。優秀なのに定職に就けない人たちを沢山見してきました。この職に就いて今思うことは、全ては運と縁であり、チャンスを掴んだなら、生かすも殺すも自分次第であるということです。全て満足のいく職場などありません。自分の中に絶対揺るがない何かがあるなら、目の前に巡ってきたチャンスを迷いなく掴むことが大切なのではないのでしょうか。

近藤(宇都)春美
防衛医科大学校 内科学講座 助教



仕事の内容とやりがい

子供の時から美味しいものを作ることや食べることが好きで、大学時代も食品化学研究室に所属していました。大学院で赤ワインポリフェノールが動脈硬化を抑制することを初めて科学的に証明したお茶の水女子大学の研究室に入室したのを機にポリフェノールの虜になりました。現所属の防衛医大でも、「医食同源」の思想をお持ちである先生方のご高配により、こちらで元々進められていた善玉コレステロールの研究とポリフェノールを組み合わせた研究をさせて頂いています。今でこそ実は良いとされているコーヒーですが、まだ良いとも悪いとも分からない時に、コーヒーポリフェノールの善玉コレステロール機能改善効果を初めて科学的に証明できた時は大変嬉しかったです。今後も科学的エビデンスに基づいた研究を行い、予防医学の観点から食品による健康長寿に貢献できたらと思っています。



進路決定のきっかけ

理数系科目は得意ではありませんでしたが、詩人宮澤賢治と同じ農芸化学科に進学して、人の役に立つ研究者になりたいと思いました。入学当初は、賢治のような土壌学者を目指していましたが、食品の機能性が唱えられはじめた時期で、食品機能学に興味を持ちました。研究者になるには大学院博士課程を修了して博士号の取得が必須と考えられていますが、私にとって現実的には難しくかつ長い道に感じられ、大学卒業後は一旦理化学メーカーに就職しました。そんな中、身近で食習慣が死に直結する大変悲しい経験をし、やはり人の役に立てる研究者になりたいと思いました。会社に勤務しながら大学院の受験勉強をするのは容易ではありませんでしたが、一念発起して大学院博士後期課程まで迷わず進学致しました。



ワークライフバランス

一旦就職しての大学院進学でしたので、私の場合は、結婚も出産のタイミングも仕事に合わせました。学生のうちは結婚しないで研究だけに打ち込むと決め、博士後期課程修了後に結婚しました。結婚後はなるべく早く子供が欲しかったのですが、現職へのお話を頂き、一仕事するまでは子供は作らないことにしました。現職に着任後3年目で仕事を論文としてまとめることができ、幸運にも時を同じくして子供を授かり、もうすぐ4歳になる娘がいます。家事は私が主に行っていますが、育児に関しては夫も同じ職種であるという理由で半々で担っています。出産前に比べると、論文を読む、書くなどに費やしていた時間が少なくなったことは事実です。職場の方々への感謝の気持ちを忘れずに仕事を続けていくことが大切だと思います。



未来の女性研究者へのメッセージ

研究者になるには、大学卒業後すぐに大学院に進学してなるべく早く博士号を取得するのが最短かつ最善の道だと思います。しかし、研究者になりたいけれども、さらに5年間大学院で学ぶのは精神的にも経済的にも無理という理由で諦められる方も多いかと思います。私の場合、勤務していた会社の方々も大学院進学による退社を快く容認して下さいたことも幸いしたのですが、会社に入っても研究者の道を諦められない方の参考にして頂けると幸いです。更に、一研究者と認められるためには、英語で論文をまとめる必要があります。私自身、実験がうまく進まない、論文が書けないという理由から精神的に落ち込んだ時期がありました。自省の意味を込めて、学生時代から英語の論文を読むことをお勧めします。



*プロフィール
久留米信愛女学院高校卒業→日本大学生物資源科学部・農芸化学科(現…生命化学科)卒業→理化学メーカー勤務→お茶の水女子大学大学院博士前期課程修了→同大学院博士後期課程修了、博士(理学)→お茶の水女子大学生生活環境研究センター講師→結婚→防衛医科大学校内科学講座 助手→出産→現職